別紙様式２

令和５年度　大学活性化経費　事業成果報告書

事業区分	(2)　グローバル化に対応した人材育成に関する事業 (5)　地域への文化発信の拠点となる取り組み
申請組織	国際コミュニケーション学部
申請組織長	**役職名**　教授　　**氏名**　　田所　光男
統括責任者	**役職名**　教授　　**氏名**　　水島　和則
課題名	「植物を通じたコミュニケーション」の国際比較研究と、そのコミュニケーションを軸にしたコミュニティ構築と地域文化の発信

	役　割	氏　　名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	水島　和則	国際コミュニケーション学部・教授	事業全般を担当
	アドバイザー	谷口　功	人間関係学部・教授	コミュニティ・デザインの理論と実践について助言と協力をおこなう

１．事業開始の背景・経緯や目的等（200 字～300 字程度で記述）

名古屋市の東山動植物園と星が丘テラスを運営する東山遊園が共創連携する「ボタニカルタウン」構想に国際コミュニケーション学部が参加し、持続可能な社会の実現という世界的課題と、自然との共生で育まれたサステナブルな日本の生活文化とを結びつけた新しい文化の創造と発信に寄与し、そうした文化を基盤とした国際交流を進めることを目的に連携事業をスタートした。この事業連携は 2023 年度で 3 年目となり、1 年目には「コットンプロジェクト」、SDGs に則った「ブラインドレストラン」開催などの成果を上げ、2 年目にはフローティングフラワーのイベント開催などの成果を挙げた。

3 年目の事業目的は(1) 植物を通したコミュニケーションと文化継承を「ボタニケーション」という造語に集約し、その現代的展開を考える。

(2)　ボタニケーションをテーマにした星が丘活性化企画を作成し、星が丘を舞台に植物文化を軸にしたコミュニティの構築をめざす。この 2 点であった。

２．事業方法（特色・独創性）等（300 字程度で記述）

この事業は、動植物園の（元）職員、東山遊園（株）の経営者や社員、商業施設に出店する店舗を経営する会社の経営者や社員、東海地域で園芸産業や花文化を推進するプロの担い手、市職員や菊里高校の教員など、星が丘のコミュニティ構築と情報発信に関心を有する数多くの社会人が学生のメンター、アドバイザーを務める点に特色がある。

事業に参加する学生たちは、授業内外で連携事業にチーム単位で参加し、ハッシュタグをつけた SNS 発信も試みるなど、コミュニケーション力を軸とする実践力を身につけることができる。

また、これらの連携事業を通して、椙山女学園大学の地域貢献を幅広く発信できることに特色がある。

３．事業の成果（600 字～800 字程度で記述）

（1）綿花を自分たちの手で栽培することで、商品のトレーサビリティや商品の背景について理解を深めるコットンプロジェクトを引き続き実施した。
（2）東山植物園内の茶室（也有園付属の茶室）に専門家である山本祐子講師を招き、俳句会を実施した。学生たちは季語を取り入れた俳句を、花を前にして読む体験をし、日本文化への理解を深めた。
（3）愛知豊明花き流通組合理事長の永田晶彦氏のガイドで東山植物園内の「万葉の散歩道」をめぐり、万葉集にうたわれた短歌の背景にある歴史や出来事、文化を学んだ。
（4）メイガーデンズの柵山氏の指導で、「母の日」終了後に花が大量に廃棄されるロスフラワー問題に対処するため、植物園内大温室に水を張って花を浮かべるフローティングフラワーを昨年に続き実施した。このイベントには大きな反響があり、中京テレビの夕方のニュース番組「キャッチ」で 2 分間にわたって紹介され、本学の学生もインタビューに答える姿が放送された。
（5）愛知豊明花き流通組合理事長の永田晶彦氏による、国際的視野でみた日本の華道文化について講演会を実施した。
（6）星が丘の西山商店街に書店を構えるキムラナオミ氏による英国の庭園文化、自然と人との関わり方に関する講演会を実施、植物文化の視点から日欧比較を掘り下げ、異文化理解を深めた。
（7）浜松で森林保全の活動に関わる永田木材の永田琢也社長を招聘し、"衣食住の"住"を入口に、日本の林業・製材業の現状や森を知り、暮らしを見つめるきっかけ作り”未来プロジェクト”の取り組みについて学び、一緒に考える機会を設けた。
（8）植物とかかわらせて星が丘テラスの活性化のためのアイディアを出すプレゼン大会を実施し、広告・マーケティングのプロであるメゾネット（株）の山本雄平氏による審査と講評をおこなった。
（9）星が丘の風景をスナップショットに収め、Instagram に投稿するスキャン・ザ・ホシガオカのプロジェクトを実施、テラス内の店舗で期間限定のパネル展示をおこない、中日新聞に報道された。

４．キーワード（本事業のキーワードを１つ以上８つ以内で記載）

①　SDGs	②　ボタニケーション	③　園芸文化	④　自然との共生
⑤コットンプロジェクト	⑥フローティングフラワー	⑦ボタニカルタウン構想	⑧スキャン・ザ・ホシガオカ

５．事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

・3 年間、東山動植物園および東山遊園（株）と連携して星ヶ丘を緑の溢れる街にする「ボタニカルタウン」構想を推進し、植物園大温室のフローティングフラワーやスキャン・ザ・ホシガオカの展示がメディアに報じられるなど、一定の成果を挙げた。しかし、こうした活動を椙山女学園大学と本学学生を十分に巻き込む段階にまで拡大できなかったのが残念である。

・植物文化を結節点に人々のコミュニティ構築をおこなうことが事業の目的の一つであり、植物園の職員・旧職員、東山遊園の社員、星が丘テラスに出店する店舗従業員やオーナー、星が丘テラスと商取引のある経営者、華道や俳句など花文化の有識者、ガーデナー、ホテルのフローリスト、英国文化に関連する書籍を扱う書店主、さらに SDGs に関わる活動をする NPO の当事者など、さまざまな人を授業に巻き込んできたが、これらの人々をネットワーク化するには至らなかった。事業はいったん区切りをつけるが、持続可能な文化を実現する人の輪を本学を中心に広げていく作業は、今後も別のかたちで継続していく。